

第 2 回山元町震災復興会議における 住民代表委員意見要旨

- 本会議は、町の第 3 回震災復興会議に向けての勉強会として、ワークショップ形式で行ったため、会議形式による議論はされませんでした。
- 以下は、ワークショップの経過における委員の発言をまとめたものです。

1 土 地 利 用
・ 居住場所と生活の糧となる農地の確保が重要
・ どこまでが居住区になるのかなど土地利用計画の方針と青写真を早く示すべき。
・ 基本計画特に土地利用計画は地域の意見、地域の力を活かした計画にすべきである。
・ 居住区と非居住区とのボーダーラインが一番気になる。
・ 磯地区と山下駅周辺地区では津波の来方が違うので、それを考慮した安全な住まいの地区を考えて欲しい。
・ 集団移転をせざる得ない時は、国道 6 号の上（西側）に住居をかまえるべき。
・ いちごづくりの農地をどの辺りに確保できるかが問題。土壌の関係で農免道路の上（西側）の地域で再開していきたいと思う（農免道路を新たなストロベリーラインへ）。
・ 買い上げるなり、代替地なり、土地がどうなるかというのが一番気になる
・ 居住区等について、町として考えていることがあれば示してほしい。
・ 駅がなく、住宅がなく、農地がなく、不便である。駅を病院の近くに持ってきて、そこに商業を集める、といったことをしないと若者は出ていく。
・ 役所裏の仮設住宅のあたりは、休耕している田んぼが多いので、国道 6 号の上（西側）でもあるし、新たな住宅をここで提供すべき。
・ 住むところについて、初めから浸水域は移転とするならば構わないが、一部分だけよくて他はだめという風に、切り捨てるのならば納得いかない。
・ 山下駅前津波高が 1 m 程度だったので、堤防やかさ上げなどの整備により、現在の場所で住めるようにすべき。

まとめ

- 町として、将来のまちづくり（土地利用計画）イメージを早急に明示すべき
- 集団移転する際は、国道 6 号より西側とし、医療・福祉、商業等の都市機能を集約すべき
- 堤防整備や地盤の嵩上げ等により安全が確保されるならば、現位置でも居住させるべき

2 交通（鉄道・道路）
・ 常磐線の復旧が遅れると人口減がますます進むだろう。
・ 電車を早く通して子供たちが通学できる町にして欲しい。足の便の確保が第一である。
・ 常磐線のルート、新駅の位置等については近隣市町村としっかり議論すべき。
・ 町の将来像と合わせた常磐線の新路線を作成し J R 等へ要望すべき。
・ 復旧には時間がかかるので、東北本線駅への直通バスを増やして欲しい（役場から岩沼駅までの直通バスの確保はできないか）。
・ 坂元は人の住める状況にないことから、鉄道の現位置復旧は困難と考える。

まとめ

- 常磐線復旧の遅延は、本町の人口流出に大きく影響する
- 常磐線ルート及び新駅整備は、隣接市町村と調整し、しっかりと J R へ要望すべき
- 常磐線復旧までは、代行バスの増便や J R 本数の多い岩沼駅へ乗り入れを検討すべき

3 防災・生活等
・ 避難所における子供たちやお年寄りの心のケアが必要。
・ 今回の津波被害が何故場所によって差が出たかを調査して欲しい。
・ 県道相馬互理線を防波堤変わりに嵩上げすればよい。
・ 今作っている防潮堤の高さは 2 m しかないので、台風により一発で壊れてしまう。
・ 防潮林である松の木はあまり機能しなかった。もっと根が張る樹種を考えるべき。
・ 仮設住宅は何年持つか不明だが、後々に町営住宅にしてはどうか。
・ 仮設住宅はあくまでも仮設であるので、きちんとした町営住宅を考えて欲しい。
・ 仮設住宅をみると 1, 2 人暮らしの老人が多く、将来介護が必要なことも考えると、宮城病院周辺の開発と、新駅の設置が必要になると思う。

まとめ

- 今後とも、子どもと高齢者へのケアを続けていく必要あり
- 県道相馬互理線は、津波からの多重的な防御機能の一つを担う道路として、嵩上げにより整備すべき。
- また、防潮林についても同上の考えのひとつとして、松だけでなく他の樹種や手法も検討すべき。
- 高齢者等も含み、新たに住宅を所有するのが困難な世帯には、町営住宅を手当てすべき。

- 従来からの少子高齢化問題も踏まえ、医療・福祉機能の中心となる宮城病院周辺への居住地整備や新駅の設置により、利便性のある本町のへそを形成すべき。



全体のとまとめ

- 上記の方向性を踏まえ、基本的には浸水地域内に住まいや鉄道は作らないものと考えていく。
- ただし、堤防等の整備により住民の生命・生活を守れるところについては、居住可能というように例外的な部分も含めて考え、次回からの復興会議で議論していく。